

表1-6a. 初婚タイミングの時間依存性ハザード分析による説明変数の推計値のリスク比  
(Relative Risk) : 25~49歳の男女、2004年の日本

説明変数	女	男
出生コホート	0.969**	0.976**
学歴		
中学以下	1.260#	1.090
高校	1.000	1.000
各種専門学校	0.837*	1.012
短大・高専	0.828**	0.962
大学・大学院	0.638**	0.936
不明・無回答	1.105	1.093
15歳時に父親不在	1.110	0.721*
同棲経験あり	3.368**	7.789**
同棲経験 x 時間 <sup>a</sup>	0.971**	0.954**
兄の数		
ゼロ†	1.000	1.000
1人	0.990	1.031
2人以上	1.221*	0.938
姉の数		
ゼロ†	1.000	1.000
1人	1.078	0.996
2人以上	1.200#	1.224#
弟の数		
ゼロ†	1.000	1.000
1人	1.069	0.964
2人以上	1.062	0.889
妹の数		
ゼロ†	1.000	1.000
1人	1.139*	0.922
2人以上	1.197	1.021
15歳までの主な生育地		
農村・漁村・山村†	1.000	1.000
地方小都市	0.995	0.934
大都市圏	0.815**	0.840*
Log likelihood	-12183.9	-8952.4
LR chi-square (d.f.)	178.1 (19)	63.5 (19)
Prob. > chi-square	0.000	0.000
(Number of cases)	(2,123)	(1,769)

\*\*1%で有意。 \*5%で有意。 #10%で有意。

注：リスク比とは推計された変数の係数(coefficient)の指数である。

†—レファレンス・カテゴリー。

a—「時間」とは初婚が起こる可能性のある年齢(初婚のリスク)期間をさす。

表 1-6b. 初婚タイミングの時間依存性ハザード分析による説明変数の推計値のリスク比  
(Relative Risk) : 25~49歳の男女、1995~96年のイタリア

説明変数	女	男
出生コホート	0.955**	0.928**
学歴		
小学校以下	8.639**	9.959*
中学	3.724**	5.743**
高校	1.000	1.000
大学以上	0.381*	0.391
学歴 x 時間 <sup>a</sup>		
小学校以下 x 時間	0.963**	0.953*
中学 x 時間	0.977**	0.963**
大学以上 x 時間	1.012	1.015
15歳以前に親が離別	1.058	2.128*
同棲経験あり	3.203*	0.554**
同棲経験 x 時間 <sup>a</sup>	0.955**	-
兄弟姉妹の数		
ゼロ †	1.000	1.000
1人	1.023	1.388#
2人	1.090	1.468*
3人	1.008	1.631*
4人以上	1.089	1.497*
15歳までの主な生育地		
村落部 †	1.000	1.000
小都市 (人口<1万人)	1.048	0.853
小都市 (人口<10万人)	1.055	0.733#
中都市 (人口<100万人)	1.122	0.798
大都市 (人口>=100万人)	1.079	0.801
Log likelihood	-22609.1	-3608.9
LR chi-square (d.f.)	734.1 (18)	181.8 (17)
Prob. > chi-square	0.000	0.000
(Number of cases)	(3,785)	(934)

\*\*1%で有意。 \*5%で有意。 #10%で有意。

注：リスク比とは推計された変数の係数(coefficient)の指数である。

†—レファレンス・カテゴリー。

a—「時間」とは初婚が起こる可能性のある年齢(初婚のリスク)期間をさす。

次に、イタリアの年齢別初婚確率のハザード・モデル分析の結果を見てみたい。表 1-6b に示されているように、イタリアでも、男女とも出生コホートと年齢別初婚確率との間には有意な負

の関係があり、最近出生したコホートほど初婚タイミングが遅くなっている。そして、この初婚タイミングの遅れ（未婚化）は男性でより顕著である。

学歴もイタリア人男女の初婚タイミングに有意な影響があり、さらにその影響には時間依存性がみられる。男女とも、高校卒の者に比べて、小学校以下もしくは中学校卒の者の初婚確率は有意に高く、一方、大学以上の高学歴の者の初婚確率は有意に低い。ここから、学歴の低いほど初婚タイミングは早いことがわかる。加えて、中学卒以下の低学歴には有意な負の時間依存性があることから、低学歴が結婚タイミングに与えるプラスの影響は、年齢が上がるにしたがって小さくなる。

15歳以前の親の離別も、イタリアの男性の初婚タイミングに有意なプラスの影響を与える。親の離別を経験していない男性に比べて、このような経験をした男性の初婚確率は2.1倍である。しかし、15歳以前に親の離婚や別居を経験した男性の割合はわずか1%であり（表1-5b参照）、この経験の初婚タイミング全体に与える影響は非常に限られている。

一方、同棲経験はイタリア人男女の初婚タイミングに有意な影響を与えるが、性別によりその影響の方向は正反対である。表1-6bに示されているように、同棲経験は女性の初婚確率を有意に押し上げるが、男性の初婚確率を大きく低下させる。さらに、同棲経験の女性の初婚タイミングへの影響には時間依存性があり、同棲経験のプラスの影響は、女性の年齢が上がるにしたがって弱くなる。この結果から、イタリアでは、女性の未婚期の同棲は結婚と結びついている傾向が強く（おそらく結婚を前提としてその相手と同棲する傾向が強く）、それは特に若い女性で顕著である一方、男性の場合、同棲は必ずしも結婚と結びついていないことが示唆される。

さらに、きょうだい数は男性の初婚確率にプラスの影響を与えるが、女性の初婚確率には有意な影響はみられない。兄弟姉妹のいない（つまり一人っ子の）男性と比べて、兄弟姉妹が1人でもいる男性の初婚確率は約4割～6割高くなっている。きょうだい数が男性の初婚タイミングに影響する一方で、女性の初婚タイミングには影響がない理由については定かではないが、一人っ子の男児がイタリアの家族に占める重要性（特に親にとっての重要性）の一端が窺える結果ではある。なお、15歳までの生育地の初婚確率への影響は、男女ともにほとんど見られない。

最後に、フランスの男女の初婚タイミングの決定要因についてみてみたい。表1-6cに示されているように、男女とも、出生コホートが最近になるほど初婚確率は有意に低い。さらに、未婚化は女性より男性でより急速であり、イタリアと同様の傾向がみられる。学歴も年齢別初婚確率に有意な影響があり、高校卒の者に比べて、大学以上の高学歴者の初婚確率は有意に低い。さらに、女性の場合、中学卒以下の者の初婚確率は高卒者に比べて約2割高く、学歴と初婚タイミングとの間に明確な負の関係が存在する。言い換えれば、学歴が初婚タイミングに与えるマイナスの影響は女性で特に強い。

表 1-6c. 初婚タイミングの時間依存性ハザード分析による説明変数の推計値のリスク比  
(Relative Risk) : 25~49 歳の男女、1994 年のフランス

説明変数	女	男
出生コホート	0.968**	0.933**
学歴		
小学校以下	1.156*	0.896
中学	1.195*	1.125
高校	1.000	1.000
大学以上	0.713**	0.714**
15 歳以前に親が離別	1.035	0.886
同棲経験あり	0.220**	0.677**
同棲経験 x 時間 <sup>a</sup>	1.018*	-
Log likelihood	-11339.6	-5939.2
LR chi-square (d.f.)	573.1 (7)	287.2 (6)
Prob. > chi-square	0.000	0.000
(Number of cases)	(2,365)	(1,523)

\*\* 1%で有意。 \* 5%で有意。 # 10%で有意。

注：リスク比とは推計された変数の係数(coefficient)の指数である。

† -レファレンス・カテゴリー。

a- 「時間」とは初婚が起こる可能性のある年齢(初婚のリスク)期間をさす。

15 歳以前に親が離別していることはフランス人男女の初婚タイミングに有意な影響を及ぼさないが、同棲経験は初婚確率を有意に低下させる。さらに、女性の場合、この変数の影響に有意なプラスの時間依存性がみられることから、同棲経験の影響は年齢が上がるにしたがって徐々に弱まるのがわかる。いずれにしても、フランスでは、男女とも、未婚期の同棲経験は初婚の確率を押し下げることから、同棲が結婚につながる傾向は弱く、むしろ同棲は結婚に代わるパートナーシップの1つの形態となってきたのではないかと考えられる。

## 5 パートナーシップ形成

本章第3節および第4節でみた未婚期の同棲経験と結婚行動の変化を、パートナーシップ形成としてひとつに捉えると、どのような性・年齢別パターンがみられるのであろうか。パートナーシップ形成には、①未婚期の同棲を経験して結婚、②同棲経験なしで結婚、③同棲のみで結婚なし、④同棲も結婚も経験なし、という4つのタイプが考えられる。表 1-7a には、2004 年日本の25~69 歳の男女における、これら4つのパートナーシップ形成タイプの年齢別パーセント分布が

示されている。この表から、2004年のわが国では、同棲を経験して結婚した者の割合は45歳未満で13～15%と、45～49歳と比べて目立って高いことがわかる。その分、この年齢層では同棲なしで結婚という伝統的なパートナーシップ形成をした者の割合は低くなっており、また25～29歳および30～34歳では、同棲のみの割合がそれぞれ7%と3%あり、さらに同棲も結婚もなしの割合が51%と24%と、未だパートナーシップ形成の経験のない者が相当水準に上っている。とはいえ、35歳以上の男女では、同棲のみの割合はほぼゼロに近いことから、同棲が安定したパートナーシップの形態のひとつとして広く認知されている北欧やフランス（B. Hoem 1988, Hoem and Rennermalm 1985, Kiernan 2001）とは異なり、わが国では同棲は結婚の前段階という傾向が強いことが示唆される。事実、JGGSでは婚前同棲経験のある既婚者男女に対し、同棲相手とその後結婚したか尋ねているが、約8割（女性の83%、男性では75%）が結婚したと答えており、男女とも明確な年齢パターンはみられない。ここからも、わが国では同棲は結婚前の一種のトライアルとしての役割を果たしており、それには大きな変化がみられないことが確認される。

表1-7a. 性・年齢階層別パートナーシップ形成パターンのパーセント分布：25～49歳の男女、2004年の日本

性・年齢	パートナーシップ形成パターン(%) :				(N)
	同棲→結婚	同棲なし→結婚	同棲のみ	同棲も結婚もなし	
男女計					
25～29歳	13.5	28.8	6.9	50.8	(641)
30～34歳	14.7	57.6	3.4	24.3	(811)
35～39歳	13.9	72.9	1.8	11.4	(904)
40～44歳	13.3	78.6	0.2	7.9	(856)
45～49歳	7.5	84.8	1.5	6.1	(922)
総計	12.5	65.6	2.7	19.2	(4,134)
女					
25～29歳	15.4	33.9	4.8	45.9	(352)
30～34歳	14.9	62.0	2.5	20.7	(447)
35～39歳	13.4	77.4	1.4	7.8	(500)
40～44歳	11.5	83.3	0.0	5.2	(456)
45～49歳	6.2	87.2	1.3	5.3	(504)
総計	12.2	69.8	1.9	16.0	(2,259)
男					
25～29歳	11.4	23.6	9.1	55.8	(289)
30～34歳	14.5	53.0	4.3	28.2	(364)
35～39歳	14.5	67.9	2.3	15.4	(404)
40～44歳	15.1	73.9	0.4	10.6	(400)
45～49歳	8.9	82.4	1.8	7.0	(418)
総計	12.9	61.3	3.4	22.4	(1,875)

注：割合(%)は全て、sample and response rate weightsによる加重平均である。

このようなわが国のパートナーシップ形成における年齢パターンは男女共通であるが、男女差に注目すると、同棲なしで結婚という伝統的タイプの割合は女性で高く、一方同棲も結婚も経験していない者の割合は、特に若い年齢層で高い。これは、女性の初婚年齢が男性よりも低い傾向が強く、また 1970 年代半ば以降の少子化により、結婚適齢期人口において「男余り」の状況が続いていることに一因があると考えられる。なお、同棲を経験して結婚した者や同棲のみの者の割合は、女性よりも男性で若干高くなっているが、目立った男女差はみられない。

表 1-7b. 性・年齢階層別パートナーシップ形成パターンのパーセント分布：25～49 歳の男女、1995～96 年のイタリア

性・年齢	パートナーシップ形成パターン(%) :				(N)
	同棲→結婚	同棲なし→結婚	同棲のみ	同棲も結婚もなし	
男女計					
25～29 歳	3.6	41.8	3.4	51.2	(1,111)
30～34 歳	6.2	71.5	2.7	19.7	(1,072)
35～39 歳	5.7	82.2	2.4	8.7	(921)
40～44 歳	4.3	88.4	1.4	5.9	(941)
45～49 歳	2.1	92.2	0.9	4.7	(854)
総計	4.4	74.1	2.2	19.2	(4,899)
女					
25～29 歳	3.6	48.6	2.9	44.9	(877)
30～34 歳	6.6	75.7	2.3	15.6	(842)
35～39 歳	5.5	84.0	1.8	8.8	(764)
40～44 歳	3.9	89.3	1.0	5.8	(757)
45～49 歳	2.2	92.8	1.1	3.9	(693)
総計	4.4	77.3	1.9	16.5	(3,933)
男					
25～29 歳	3.5	15.9	5.2	75.4	(234)
30～34 歳	4.9	56.8	4.0	34.3	(230)
35～39 歳	6.8	73.8	5.2	14.2	(157)
40～44 歳	5.9	84.7	3.1	6.3	(184)
45～49 歳	2.0	89.7	1.8	0.0	(161)
総計	4.6	61.6	3.6	30.2	(966)

注：割合(%)は全て、sample and response rate weights による加重平均である。

次に、1995～96年のイタリアにおけるパートナーシップ形成の性・年齢パターンをみると、表 1-7b に示されているように、同棲を経験して結婚した者の割合は、男女とも約 4%とわが国よりも相当に低く、明確な男女差や年齢パターンもみられない。一方、同棲も結婚も経験していない者の割合が高い 25～29 歳（そして男性の場合は 30～34 歳も）を除き、同棲経験なしで結婚という伝統的パートナーシップ形成のパターンに属する者の割合は高い。さらに、同棲のみの者の割合は 40 歳以上の女性では 1%、男性でも 2～3%とほぼゼロに近く、イタリア社会では同棲は人口

のごく一部で起こっている現象であり、またたとえ同棲しても、それは比較的短期間である傾向が強いことが示唆される。

表 1-7c. 性・年齢階層別パートナーシップ形成パターンのパーセント分布：25～49歳の男女、1994年のフランス

性・年齢	パートナーシップ形成パターン(%) :				(N)
	同棲→結婚	同棲なし→結婚	同棲のみ	同棲も結婚もなし	
男女計					
25～29歳	28.5	13.9	35.6	21.9	(874)
30～34歳	39.4	29.1	20.7	10.9	(923)
35～39歳	35.8	45.6	10.6	8.1	(890)
40～44歳	27.7	60.6	6.6	5.2	(768)
45～49歳	20.9	69.8	4.2	5.1	(606)
総計	30.7	43.4	15.7	10.3	(4,061)
女					
25～29歳	32.4	17.3	34.2	16.1	(514)
30～34歳	35.8	35.2	20.2	8.8	(544)
35～39歳	33.0	51.2	8.7	7.1	(571)
40～44歳	22.8	66.8	6.3	4.1	(476)
45～49歳	18.0	72.7	4.6	4.6	(358)
総計	28.6	48.3	14.9	8.2	(2,463)
男					
25～29歳	22.5	8.7	37.8	31.0	(360)
30～34歳	44.7	20.1	21.4	13.9	(379)
35～39歳	40.1	36.9	13.6	9.5	(319)
40～44歳	35.2	51.1	7.0	6.8	(292)
45～49歳	25.2	65.3	3.6	5.9	(248)
総計	33.8	35.9	16.9	13.5	(1,598)

注：割合(%)は全て、sample and response rate weights による加重平均である。

最後に、1994年のフランスにおけるパートナーシップ形成パターンをみると、同棲を経験して結婚した者の割合は、25～49歳の男女で平均31%（女性では29%、男性は34%）であり、日本の2.5～3倍、そしてイタリアの7～8倍と高水準である（表1-7c参照）。さらに、同棲のみで結婚を経験していない者、25～49歳の男女平均で16%と他の2国と比べて突出して高い。このような同棲の浸透に比例して、同棲なしで結婚した割合は男女計で44%（女性で48%、男性では36%）と、この伝統的パートナーシップ形成パターンをたどった男女の割合がおよそ6割から8割近くある他の2国に比べて、目立って低くなっている。これらの結果から、1990年代半ばのフランスでは、同棲が結婚に代わるパートナーシップの一形態として社会に広まっていることがわかる。

## 6 婚前妊娠と婚前出産

### (1) 婚前妊娠と婚前出産の性・年齢パターン

最後に、前節でみたパートナーシップ形成について、出生との関係からさらに詳細に分析してみたい。わが国を含むアジア諸国では、出生は結婚と結びついており、子どもをもつ事が結婚の目的の1つである傾向が強い。しかし一方、近年わが国では「できちゃった結婚」という言葉の広まりからも窺われるように、婚前妊娠が増加している (Iwasawa and Raymo 2005)。わが国における未婚化と少子化の進行を考えると、結婚を含むパートナーシップ形成と出産の順序 (sequential order) を検証することは重要である。

表1-8には、日本、イタリア、フランスにおける子どものいる20~49歳の既婚男女の年齢階層別にみた、婚前妊娠および婚前出産経験者の割合が示されている。ここでいう「婚前出産」とは、初婚以前に第1子出生を経験している者をさし、結婚相手が実際に子どもの親であるかどうかの確証はない。一方、「婚前妊娠」は第1子出生が初婚から8ヶ月未満に起こっている者と定義する。この場合も、婚前出産と同様、婚前妊娠が結婚相手によるか否かの確定はできないが、婚前妊娠では結婚までの間隔が短いことから、妊娠の当事者同士が結婚する確率はより高いと考えられる。

この表の一番上のパネルから、わが国では、第1子が婚前妊娠であると考えられる子どものいる20~49歳の既婚男女の割合は、平均で19%と相当な水準にあり、またこの割合は男女とも年齢が低くなるにつれて劇的に高くなっていることがわかる。ほとんどが妊娠したため結婚した(つまり「できちゃった結婚」した)であろう少数の20歳代前半の男女は別にしても、それより上の年齢層でも婚前妊娠割合は相当な水準にあり、25~29歳の既婚女性の38%、30~34歳の女性では26%、そして35~39歳の女性では17%が結婚後8ヶ月未満に第1子出生を経験している。同年齢の男性の婚前妊娠経験割合は、それぞれ43%、22%、20%である。ここから、わが国における近年の婚前妊娠の急速な増加が確認される。一方、わが国の20~49歳の既婚男女の婚前出産割合には明確な年齢パターンは見られず、またその水準も男女計の平均で2%と非常に低い。これは、わが国の婚外出生率が1960年以降1~2%の水準で推移していることから予想された結果であり、出産は依然として結婚のなかで起こる傾向が強いことが再確認される。

次に、イタリアをみると、表1-8の真ん中のパネルに示されているように、婚前妊娠経験割合には目立った男女差はなく、20~49歳の平均で15%とわが国より若干低いがほぼ同様の水準にある。しかし、わが国とは異なり、イタリア人男女の婚前妊娠割合には、未婚化が進行するなかでの早婚による選択性バイアスが強いと考えられる20~24歳の女性および20歳代の男性を除いて、明確な年齢パターンはみられない。一方、婚前出産経験者の割合をみると、20~49歳の男女計の平均で5%とわが国よりも高いが、絶対水準は低く、1990年代半ばのイタリアにおいて未婚で子どもをもつことは人口のごく一部に限られていることがわかる。<sup>(12)</sup> また、婚前妊娠同様、最も若い年齢層を除き婚前出産割合に明確な年齢パターンはみられない。



表 1-8. 性・年齢階層別婚前出産および婚前妊娠割合(%)：子どものいる 20～49 歳の既婚男女、  
2004 年の日本、1995～96 年のイタリア、1994 年のフランス

国名・年齢	女			男			男女計		
	婚前 出産 (%)	婚前 妊娠 (%)	(N)	婚前 出産 (%)	婚前 妊娠 (%)	(N)	婚前 出産 (%)	婚前 妊娠 (%)	(N)
日本									
20～24 歳	0.0	95.5	(23)	6.2	69.5	(15)	2.7	84.0	(38)
25～29 歳	4.5	37.5	(117)	7.5	42.5	(67)	5.7	39.6	(184)
30～34 歳	2.3	25.8	(217)	5.2	21.8	(150)	3.6	24.0	(367)
35～39 歳	1.7	17.4	(461)	3.2	20.3	(308)	2.3	18.7	(769)
40～44 歳	1.2	14.9	(387)	4.4	11.4	(298)	2.7	13.3	(685)
45～49 歳	1.8	12.3	(411)	3.2	12.6	(328)	2.5	12.4	(739)
総計	1.9	19.6	(1,616)	4.1	18.6	(1,166)	2.9	19.1	(2,782)
イタリア									
20～24 歳	16.6	32.3	(60)	--	--	--	17.3	31.1	(63)
20～29 歳	5.6	15.6	(298)	12.4 <sup>a</sup>	21.4 <sup>a</sup>	(28)	5.9	16.1	(323)
30～34 歳	4.9	13.2	(592)	2.6	10.6	(101)	4.6	12.8	(693)
35～39 歳	4.4	12.9	(605)	3.8	13.8	(104)	4.3	13.0	(709)
40～44 歳	3.9	17.5	(655)	5.2	16.5	(145)	4.1	17.3	(800)
45～49 歳	3.8	15.1	(608)	4.4	13.3	(137)	3.9	14.8	(745)
総計	4.6	15.2	(2,818)	4.5	14.2	(515)	4.6	15.0	(3,333)
フランス									
20～24 歳	22.9	21.4	(34)	--	--	--	22.4	18.9	(40)
25～29 歳	14.5	12.6	(161)	18.9 <sup>a</sup>	20.9 <sup>a</sup>	(53)	15.7	15.3	(208)
30～34 歳	7.1	10.7	(298)	9.2	12.8	(178)	7.9	11.5	(476)
35～39 歳	8.0	20.8	(430)	9.5	12.8	(209)	8.5	17.9	(639)
40～44 歳	5.2	22.2	(384)	9.4	21.9	(225)	6.8	22.1	(609)
45～49 歳	8.7	21.0	(303)	4.9	27.6	(197)	7.2	23.6	(500)
総計	8.3	18.6	(1,610)	9.0	19.3	(862)	8.6	18.8	(2,472)

注：割合(%)は全て、少なくとも子どもが 1 人いる既婚者を対象とした sample and response rate weights による加重平均である。「婚前出産」は、既婚者のうち第 1 子出生が初婚より前に起こっている者をさし、初婚相手が第 1 子の親であるかどうかは不明である。また、「婚前妊娠」は、既婚者のうち第 1 子出生が初婚から 8 ヶ月未満（結婚と同年代・同月も含む）に起こっている者をさし、婚前妊娠が結婚相手によるか否かは不明である。

a—20-24 歳の者を含む。

次に、フランスに目を向けると、20～49 歳の子どものいる既婚者男女の婚前妊娠経験の平均割合は 19%と、わが国とほぼ同水準にあることがわかる（表 1-8 の一番下のパネル参照）。しかし、婚前妊娠割合の年齢パターンをみると、20 歳代を除くと、わが国とは対照的に、年齢が上がるに

したがって婚前妊娠経験割合は高くなる傾向がみられる。ここから、フランスでは、わが国とは異なり、婚前妊娠（「できちゃった結婚」）はむしろ近年減少傾向にあることが示唆される。一方、婚前出産割合は20～49歳の男女計の平均が9%と、わが国やイタリアの約3倍の水準である。<sup>(13)</sup> さらに、選択性バイアスの高い20歳代を除き、年齢による婚前出産割合には明確な年齢パターンはみられない。ここから、既婚者の婚前妊娠についてみるかぎり、フランスでは明らかな変化の傾向は認められない。

## (2) 婚前妊娠の決定要因

次に、25～49歳の既婚男女の婚前妊娠と婚前出産の決定要因を、ロジスティック回帰分析モデルを用いて探してみたい。表1-9a～表1-9cには、日本、イタリア、およびフランスについての分析のモデルに導入された説明変数の記述統計量が、それぞれ国別に示されている。まず、婚前妊娠経験確率のロジスティック回帰分析の結果をみると、表1-10aに示されているように、わが国では、男性と女性の間には有意な差はないことがわかる。一方、年齢による影響は男女ともに大きく、年齢が上がるにしたがって、婚前妊娠確率は急激に低下する。この年齢と婚前妊娠との間のほぼ線形の強い負の関係は、特に女性において顕著であり、わが国における婚前妊娠の広がり、女性においてより最近かつ急速に起こっていることがこの多変量解析により確認される。

表1-10aに示されているように、わが国では、男女ともに学歴と婚前妊娠との間にも有意な負の関係がみられる。高校卒の男女に比べて、中卒男女の婚前妊娠確率は有意に高い一方、短大や高専および4年制大学以上といった高学歴者の婚前妊娠確率ははるかに低い。『出生動向基本調査』のデータを用いた先行研究（Iwasawa and Raymo 2005）でも、1980～97年の結婚コホートの女性の婚前妊娠経験確率は、低学歴層の女性で高く、高学歴層で顕著に低いという結果が得られており、本章の分析結果は支持される。

回答者が15歳時の離別や死亡による父親不在は婚前妊娠確率に有意な影響を及ぼさない一方、婚前同棲経験は婚前妊娠確率を押し上げ、これは特に女性で顕著である。

ここから、わが国では同棲中に妊娠し、それが結婚と結びつく傾向があり、その可能性は特に女性で高いことが示唆される。さらに、わが国では姉の存在は女性の婚前妊娠経験確率を押し上げる。姉がいない女性に比べて、姉が1人いる女性の婚前妊娠確率は79%高く、姉が2人以上いれば2.6倍と非常に高い。妹が2人以上いる女性の婚前妊娠経験確率も、妹がいない女性の1.9倍で有意に高い。しかし、これらの姉や妹の数の女性の婚前妊娠への影響が何を意味するのかは明確ではない。

表 1-9a. 婚前妊娠および婚前出産のロジスティック回帰分析の説明変数の記述統計量：  
25～49歳の既婚男女、2004年の日本

説明変数	男女合計		女		男	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
性別=女	0.581	0.499	-	-	-	-
年齢						
25～29歳 †	0.067	-	0.073	-	0.058	-
30～34歳	0.134	0.340	0.136	0.343	0.130	0.337
35～39歳	0.280	0.449	0.289	0.454	0.268	0.443
40～44歳	0.250	0.433	0.243	0.429	0.259	0.438
45～49歳	0.269	0.444	0.258	0.438	0.285	0.452
学歴						
中学以下	0.049	0.217	0.038	0.192	0.065	0.246
高校 †	0.404	-	0.420	-	0.382	-
各種専門学校	0.133	0.339	0.162	0.369	0.092	0.289
短大・高専	0.176	0.381	0.257	0.437	0.064	0.245
大学・大学院	0.227	0.419	0.114	0.318	0.384	0.487
不明・無回答	0.011	0.104	0.009	0.094	0.014	0.117
15歳時に父親不在 <sup>a</sup>	0.052	0.222	0.054	0.225	0.050	0.218
婚前同棲経験あり	0.147	0.354	0.136	0.342	0.125	0.331
兄の数						
ゼロ †	0.679	-	0.684	-	0.672	-
1人	0.253	0.435	0.240	0.427	0.270	0.444
2人以上	0.068	0.252	0.076	0.265	0.057	0.233
姉の数						
ゼロ †	0.659	-	0.661	-	0.656	-
1人	0.259	0.438	0.264	0.441	0.253	0.435
2人以上	0.082	0.274	0.075	0.264	0.091	0.288
弟の数						
ゼロ †	0.688	-	0.670	-	0.714	-
1人	0.267	0.443	0.286	0.452	0.242	0.429
2人以上	0.044	0.206	0.045	0.207	0.044	0.204
妹の数						
ゼロ †	0.687	-	0.676	-	0.701	-
1人	0.268	0.443	0.274	0.446	0.260	0.439
2人以上	0.045	0.208	0.050	0.218	0.039	0.194

注：†-レファレンス・カテゴリー

表 1-9b. 婚前妊娠および婚前出産のロジスティック回帰分析の説明変数の記述統計量：  
25～49 歳の既婚男女、1995～96 年のイタリア

説明変数	男女合計		女		男	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
性別=女	0.843	0.363	--	--	--	--
年齢						
25～29 歳 †	0.098	--	0.109	--	0.049	--
30～34 歳	0.212	0.409	0.215	0.411	0.197	0.398
35～39 歳	0.217	0.412	0.219	0.414	0.203	0.403
40～44 歳	0.245	0.430	0.237	0.426	0.283	0.451
45～49 歳	0.228	0.419	0.220	0.415	0.268	0.443
学歴						
小学校以下	0.223	0.416	0.235	0.424	0.160	0.367
中学	0.348	0.476	0.330	0.474	0.396	0.490
高校 †	0.340	--	0.350	--	0.335	--
大学以上	0.089	0.284	0.085	0.279	0.109	0.312
15 歳以前に親が離別	0.015	0.123	0.016	0.124	0.014	0.116
婚前同棲経験あり	0.050	0.218	0.049	0.217	0.053	0.224

注：†-レファレンス・カテゴリー

表 1-9c. 婚前妊娠および婚前出産のロジスティック回帰分析の説明変数の記述統計量：  
25～49 歳の既婚男女、1994 年のフランス

説明変数	男女合計		女		男	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
性別=女	0.637	0.481	--	--	--	--
年齢						
25～29 歳 †	0.099	--	0.115	--	0.068	--
30～34 歳	0.198	0.399	0.192	0.394	0.210	0.407
35～39 歳	0.254	0.435	0.264	0.441	0.237	0.425
40～44 歳	0.246	0.431	0.237	0.425	0.263	0.441
45～49 歳	0.203	0.402	0.192	0.394	0.222	0.416
学歴						
小学校以下	0.334	0.472	0.348	0.476	0.310	0.463
中学	0.094	0.291	0.104	0.306	0.075	0.263
高校 †	0.403	--	0.377	--	0.449	--
大学以上	0.169	0.375	0.171	0.377	0.166	0.372
15 歳以前に親が離別	0.077	0.267	0.080	0.272	0.071	0.257
婚前同棲経験あり	0.435	0.496	0.399	0.490	0.499	0.500

注：†-レファレンス・カテゴリー

表 1-10a. 婚前妊娠のロジスティック回帰分析による説明変数の推計値のオッズ比

(Odds Ratios) : 25~49 歳の既婚男女、2004 年の日本

説明変数	男女合計	女	男
性別=女	1.012	-	-
年齢			
25~29 歳	1.000	1.000	1.000
30~34 歳	0.536**	0.657	0.348**
35~39 歳	0.412**	0.415**	0.375**
40~44 歳	0.268**	0.332**	0.184**
45~49 歳	0.238**	0.246**	0.206**
学歴			
中学以下	1.558*	1.593	1.613
高校	1.000	1.000	1.000
各種専門学校	0.790	0.820	0.721
短大・高専	0.610**	0.693*	0.357*
大学以上	0.450**	0.503*	0.394**
不明・無回答	2.510*	3.254*	1.591
15 歳時に父親不在	1.147	1.471	0.835
婚前同棲経験あり	1.799**	2.014**	1.583*
兄の数			
ゼロ †	1.000	1.000	1.000
1 人	1.180	1.030	1.377
2 人以上	1.343	1.407	1.145
姉の数			
ゼロ †	1.000	1.000	1.000
1 人	1.517**	1.788**	1.154
2 人以上	1.952**	2.598**	1.192
弟の数			
ゼロ †	1.000	1.000	1.000
1 人	1.288	1.338#	1.167
2 人以上	1.235	1.087	1.290
妹の数			
ゼロ †	1.000	1.000	1.000
1 人	1.038	1.061	0.968
2 人以上	1.441	1.945*	0.655
Log likelihood	-1164.1	-683.2	-469.8
LR chi-square (d.f.)	193.2 (20)	122.2 (19)	92.5 (19)
Prob. > chi-square	0.000	0.000	0.000
(Number of cases)	(2,709)	(1,573)	(1,136)

\*\* 1%で有意 \*5%で有意 #10%で有意

注：オッズ比とは推計された変数の係数(coefficient)の指数である。

†-レファレンス・カテゴリー

表 1-10b. 婚前妊娠のロジスティック回帰分析による説明変数の推計値のオッズ比  
(Odds Ratios) : 25~49 歳の既婚男女、1995~96 年のイタリア

説明変数	男女合計	女	男
性別=女	0.943	--	--
年齢			
25~29 歳	1.000	1.000	1.000
30~34 歳	0.807	0.877	0.431
35~39 歳	0.788	0.792	0.666
40~44 歳	1.119	1.156	0.824
45~49 歳	0.915	0.981	0.581
学歴			
小学校以下	1.273#	1.214	1.684
中学校	1.397**	1.378*	1.493
高校	1.000	1.000	0.739
大学以上	0.530**	0.649#	0.107*
15 歳以前に親が離別	1.343	1.488	0.765
婚前同棲経験あり	2.290**	2.241**	2.393#
Log likelihood	-1360.0	-1144.4	-211.0
LR chi-square (d.f.)	50.7 (10)	35.0 (9)	24.8 (9)
Prob. > chi-square	0.000	0.000	0.000
(Number of cases)	(3,252)	(2,741)	(511)

\*\*1%で有意 \*5%で有意 #10%で有意

注：オッズ比とは推計された変数の係数(coefficient)の指数である。

†-レファレンス・カテゴリー

次に、イタリアに目を向けると、婚前妊娠経験確率に有意な男女差がみられないだけでなく、有意な年齢差もみられない（表 1-10b 参照）。しかし、学歴は女性の婚前妊娠経験確率に有意な負の影響を及ぼしており、高卒の女性に比べて、中卒女性の婚前妊娠確率は 38% 高く、一方大学以上の高学歴女性の婚前妊娠確率は約 35% 低い。したがって、日本同様イタリアでも、女性については、婚前妊娠経験確率は低学歴層で高く、高学歴層で低いという結果が得られる。男性では、学歴の婚前妊娠確率への影響は女性ほど明確ではないが、高卒男性に比べて、大学以上の学歴をもつ男性の婚前妊娠確率は若干（約 8%）高くなっている。

また、イタリアでも婚前同棲経験は婚前妊娠確率を増加させ、それは特に女性で有意である。婚前同棲経験のない男女に比べて、そのような経験のある者の婚前妊娠確率は 2.2~2.3 倍と高い。ここから、日本と同様に、イタリアにおいても同棲中に妊娠すると、それが結婚と結びつく傾向があり、その傾向は特に女性で顕著であることが示唆される。

表 1-10c. 婚前妊娠のロジスティック回帰分析による説明変数の推計値のオッズ比  
(Odds Ratios) : 25~49 歳の既婚男女、1994 年のフランス

説明変数	男女合計	女	男
性別=女	1.239#	-	-
年齢			
25~29 歳	1.000	1.000	1.000
30~34 歳	1.208	1.227	1.120
35~39 歳	1.587*	1.836*	1.106
40~44 歳	1.977**	2.259**	1.546
45~49 歳	1.835**	1.682#	2.047#
学歴			
小学校以下	1.117	1.315#	0.810
中学校	1.103	1.257	0.856
高校	1.000	1.000	1.000
大学以上	0.501**	0.540**	0.439**
15 歳以前に親が離別	1.119	1.261	0.871
婚前同棲経験あり	1.002	1.056	0.935
Log likelihood	-1200.4	-784.1	-410.7
LR chi-square (d.f.)	47.1 (10)	38.0 (9)	17.1 (9)
Prob. > chi-square	0.000	0.000	0.047
(Number of cases)	(2,584)	(1,644)	(940)

\*\*1%で有意 \*5%で有意 #10%で有意

注：オッズ比とは推計された変数の係数(coefficient)の指数である。

†レファレンス・カテゴリー

最後に、フランスをみると、表 1-10c に示されているように、男性に比べて女性の婚前妊娠経験確率は高い（10%の水準で有意）。また、わが国とは対照的に、年齢が高いほど、婚前妊娠確率が有意に高い傾向があり、それは特に女性で顕著である。ここから、フランスでは未婚女性が妊娠したら結婚する傾向（英語でいう *shot-gun marriage*）は減少していることが示唆される。一方、高等教育は既婚男女の婚前妊娠確率を押し下げる。高卒の女性と比べて、大学以上の高学歴者の婚前妊娠確率は 46% 低く、男性の場合は 56% 低い。また、女性では小学校以下の最も低い学歴層の女性は、高卒の女性と比べて婚前妊娠確率が約 32% 高くなっている。なお、日本やイタリアとは対照的に、フランスでは未婚期の同棲経験は婚前妊娠確率に有意な影響を与えていない。ここから、近年のフランスでは、同棲中に妊娠しても、それが結婚につながる確率は低いことが示唆される。

### (3) 婚前出産の決定要因

次に、既婚者の婚前出産（初婚以前に出産を経験すること）に関するロジスティック回帰分析の結果をみてみたい。表1-11aに示されているように、わが国では、年齢や学歴は婚前出産確率に有意な影響を及ぼしていない。ここから、日本における未婚期の出産確率はあまり変化しておらず、高学歴化による影響もほとんどないことがわかる。一方、女性が結婚前に出産を経験する確率は、男性に比べて有意に低い。婚前妊娠経験確率には男女差がない一方で、婚前出産経験に有意な男女差があることについては、未婚男女同士が「できちゃった結婚」することが多いと思われる婚前妊娠とは異なり、婚前出産では相手が未婚者でない場合がより多いのではないかと考えられる。また、未婚者が子どもをもつことへの社会的認識は男性よりも女性に対してより厳しいと考えられることから、女性回答者が婚前出産を過少申告した可能性も否定できない。さらに、わが国では、同棲経験者の婚前出産確率は、同棲経験がない者と比べて有意に高いが、これは特に男性で顕著である。先述したように、未婚期の同棲は男女の婚前妊娠確率を有意に上昇させるが、男性の場合、同棲は婚前妊娠とも結びついていることがわかる。

次に、イタリアに目を向けると、表1-11bに示されているように、婚前同棲経験を除き、婚前出産確率に有意な影響を与える要因はない。言い換えれば、イタリアでは、婚前出産確率には性別や年齢および教育水準による有意な格差はなく、15歳以前の親の離別といったライフコース要因も婚前妊娠に影響しない。一方、未婚期の同棲経験は婚前出産確率に対して非常に大きなプラスの影響があり、女性の場合、同棲経験者の婚前出産確率は非経験者の約11倍、男性でも7.5倍となっている。ここから、イタリアでは結婚前に子どもをもった者の割合は低いが、未婚時に出産する者の多くが同棲経験者（おそらく同棲中の者）である可能性が高く、特に女性の場合はそうであることが示唆される。

最後にフランスをみると、イタリア同様、婚前出産確率に有意な男女差および年齢差はみられないが、日本やイタリアとは異なり、学歴と婚前出産確率の間には有意な負の関係があり、それは特に女性で顕著である（表1-11c参照）。高卒の女性と比べて、小学校以下という最も低い学歴層の女性の婚前出産確率は2倍強であり、一方大学以上の最高学歴層の女性の確率はおよそ80%低くなっている。他の2国とは異なり、フランスでは15歳以前の親の離別も、特に女性の婚前出産確率を有意に押し上げる。親が離別した女性の婚前出産確率は、そのような経験のない女性に比べて、約1.7倍である。親の離別よりもさらに強い影響力をもつライフコース要因が未婚期の同棲経験である。婚前同棲の経験は男女の婚前出産確率を大きく押し上げるが、その影響力は女性でより大きい。婚前同棲経験のある女性の婚前出産確率は、そのような経験のない女性の9倍以上であり、男性の場合は約5倍である。ここから、フランスでは、未婚期に出産した（そしてその後結婚した）者の多くは未婚期の同棲の経験者であり、結婚しないで同棲するのみならず、それが出産に至る可能性も高いことが示唆される。



表 1-11a. 婚前出産のロジスティック回帰分析による説明変数の推計値のオッズ比  
(Odds Ratios) : 25~69 歳の既婚男女, 2004 年の日本

説明変数	男女合計	女	男
性別=女	0.394**	--	--
年齢			
25~29 歳	1.000	1.000	1.000
30~34 歳	0.705	0.591	0.771
35~39 歳	0.529	0.460	0.565
40~44 歳	0.618	0.354	0.828
45~49 歳	0.578	0.511	0.625
学歴			
中学	1.277	2.222	0.956
高校	1.000	1.000	1.000
各種専門学校	1.162	0.864	1.547
短大・高専	0.920	0.847	0.874
大学以上	0.619	0.293	0.707
不明・無回答	1.648	-- <sup>a</sup>	2.251
15 歳時に父親不在	0.830	0.454	1.289
婚前同棲経験あり	2.732**	2.415*	2.979**
Log likelihood	-340.3	-142.1	-195.2
LR chi-square (d.f.)	41.4 (12)	12.6 (10)	19.9 (11)
Prob. > chi-square	0.000	0.248	0.047
(Number of cases)	(2,717)	(1,566)	(1,137)

\*\* 1%で有意 \* 5%で有意 # 10%で有意

注：オッズ比とは推計された変数の係数(coefficient)の指数である。

† レファレンス・カテゴリー

a—学歴が不明・無回答の 14 人の中で婚前出産を経験した者はゼロであるため、分析に含まれていない。

表 1-11b. 婚前出産のロジスティック回帰分析による説明変数の推計値のオッズ比

(Odds Ratios) : 25~69 歳の既婚男女, 1995~96 年のイタリア

説明変数	男女合計	女	男
性別=女	0.988	-	-
年齢			
25~29 歳	1.000	1.000	1.000
30~34 歳	0.893	0.959	0.490
35~39 歳	0.880	0.896	0.782
40~44 歳	0.859	0.850	0.886
45~49 歳	0.941	0.840	1.345
学歴			
小学校以下	1.568#	1.517	2.636
中学	1.390	1.266	3.020
高校	1.000	1.000	1.000
大学以上	1.511	1.198	4.363#
15 歳以前に親が離別	1.105	0.989	1.762
婚前同棲経験あり	10.042**	10.641**	7.536**
Log likelihood	-553.3	-462.9	-87.4
LR chi-square (d.f.)	103.2 (10)	90.4 (9)	18.8 (9)
Prob. > chi-square	0.000	0.000	0.027
(Number of cases)	(3,252)	(2,741)	(511)

\*\*1%で有意 \*5%で有意 #10%で有意

注：オッズ比とは推計された変数の係数(coefficient)の指数である。

†レファレンス・カテゴリー

表 1-11c. 婚前出産のロジスティック回帰分析による説明変数の推計値のオッズ比  
(Odds Ratios) : 25~69 歳の既婚男女, 1994 年のフランス

説明変数	男女合計	女	男
性別=女	1.266	-	-
年齢			
25~29 歳	1.000	1.000	1.000
30~34 歳	0.773	0.882	0.535
35~39 歳	1.179	1.483	0.666
40~44 歳	1.081	1.097	0.863
45~49 歳	1.064	1.529	0.518
学歴			
小学校以下	1.780**	2.090**	1.344
中学	1.289	1.341	1.157
高校	1.000	1.000	1.000
大学以上	0.289**	0.206**	0.454#
15 歳以前に親が離別	1.717*	1.729*	1.691
婚前同棲経験あり	7.259**	9.129**	4.817**
Log likelihood	-698.2	-431.8	-260.3
LR chi-square (d.f.)	219.4 (10)	181.4 (9)	50.0 (9)
Prob. > chi-square	0.000	0.000	0.000
(Number of cases)	(2,584)	(1,644)	(940)

\*\* 1%で有意 \* 5%で有意 # 10%で有意

注：オッズ比とは推計された変数の係数(coefficient)の指数である。

† -レファレンス・カテゴリー

## 7 要約と考察

近年、わが国のパートナーシップ形成および家族形成のパターンは目覚しく変化している。本章の分析の結果、わが国では未婚化が進行していることに加え、未婚期の同棲と婚前妊娠の急速な増加が示唆された。最近の出生コホートほど初婚確率は有意に低い一方で、未婚期の同棲や婚前妊娠の確率は年齢が若いほど有意に高く、この傾向は特に女性で顕著である。ここから、未婚化の進行および未婚期の同棲や婚前妊娠の増加は、男性よりも女性で急速であることが示唆され、今後もわが国では未婚化が継続する一方で、同棲や結婚に先立つ妊娠（おそらくその相当部分は妊娠したことによる結婚）が増加していくのではないかと予想される。

2004年のわが国を1990年代半ばのイタリアとフランスと比べると、未婚期の同棲の浸透度はフランスで最も高く、イタリアで最も低く、日本はその中間にある。また、フランスと日本では未

婚期の同棲が増加しているが、イタリアでは人口のごく一部にとどまっている。さらに、フランスでは最初のパートナーシップ形成を同棲により始める男女の割合は高く、25～34歳ではおよそ6割にのぼる。その分、同棲なしで結婚する者の割合はこの若い年齢層では少数派であり、同棲が結婚に代わるパートナーシップの形態として社会に浸透してきていることが分かる。一方、わが国では同棲は結婚の前段階的傾向が強く、また同棲なしで結婚する者の割合も高いのみならず、若い年齢層ではパートナーシップ形成をしていない者の割合も高い。したがって、今後わが国が西欧・北欧型の「第2の人口転換」に接近していく可能性は否定できないが、わが国の家族主義（familism）の文化的伝統を考えると、1960年代以降のフランスを含む西欧や北欧諸国で起こったような急激な同棲の浸透や結婚と出産の乖離が、近い将来わが国で起こる可能性は低いのではない。イタリアもまた家族主義の伝統をもつ国であり、同じヨーロッパに位置しながらも、未婚期の同棲の水準と低さと変化のなさからも、パートナーシップ形成に対してそれぞれの国の文化的背景のもつ影響力の大きさが窺われる。

また、本章の分析の結果、未婚期の同棲への学歴の影響については、わが国とヨーロッパ両国との間に対照的なパターンが見られた。わが国では、高い教育水準（特に女性の高学歴）は婚前同棲確率を有意に低下させるが、イタリアとフランスでは高学歴は未婚期の同棲とプラスに結びついている。ここから、高学歴化がなければ、わが国における未婚期の同棲経験割合はより高くなっていた可能性が示唆されると同時に、今後この非伝統的パートナーシップ形成行動が低学歴層により集中していくことも考えられる。一方、ヨーロッパの2国では、未婚期の同棲は高学歴層により集中しており、社会のエリート層が新しいパートナーシップ形成行動の牽引者となっている可能性が示唆される。また、本章の分析の結果、3国全てで学歴は初婚タイミングと婚前妊娠に（そしてフランスでは婚前出産にも）に有意な負の影響を及ぼし、それは特に男性よりも女性で顕著であることが見出された。これらの国々における1970年代以降の女性の高学歴化の進行を考え合わせると、この高学歴化は急速な未婚化の主要要因の1つとなっており、その結果、少子化の主な要因ともなっていることが示唆される。

また、本章の多変量解析により、未婚期の同棲経験は日本人男女およびイタリア人女性の年齢別初婚確率を有意に増加される一方で、イタリア人男性およびフランス人男女の初婚確率を低下させることがわかった。したがって、わが国とイタリア女性の場合、未婚期の同棲は結婚に結びつく確率が高いが、イタリア人男性とフランス人男女にとっては、同棲はむしろ結婚に代わるパートナーシップ形態である可能性が高いことが示唆される。しかし、未婚期の同棲は、3国全てにおいて、男女の婚前妊娠と婚前出産の確率を大きく押し上げている。ここから、わが国でもヨーロッパの2国でも、未婚期に同棲を経験した場合、それが結婚に先立つ妊娠や出産につながる傾向が強いことが示唆される。唯一の例外は、フランスにおける婚前妊娠であり、同国では、男女とも未婚期の同棲と婚前妊娠は結びついていない。フランスでは未婚期の同棲は婚前出産と有意なプラスの関係があることから、同棲中に妊娠しても、そのために結婚する（つまり「できっ